Japaneseman In NY（ニューヨーク生活）

Barry Harris @ KODAMA SUSHI (Photo by Yasuhide Iwakiri)

≪バリーさん≫

今回は度々このコーナーで書いてきたニューヨークでのウェイター時代の話。4 年間のウェイター生活の中で、自分にとっても特別な思い出、特別な存在だった常連さんが何人かいて、以前も何人かこのコーナーで触れたが、今回紹介するバリーさんはその中でも更に特別な人だった。

「…人だった」と過去形になってしまっているが、勿論今でも元気で、左の写真で店のオヤジさんの看板と一緒に写っているのが最近撮影されたばかりのバリーさんの姿。

ジャズに親しみがない人にとってはただの外人のおじいちゃんに見えるかもしれないが、何を隠そう、ジャズ・シーンでは“超”が付くほどの大御所で、半世紀以上も第一線で活躍し続けている名ジャズ・ピアニストのバリー・ハリスさんだ。写真の姿から米国版水戸黄門のように見えなくもないが、ジャズを志す人からすると「頭が高い！」と言いたくなるような存在と言ってもけして過言でないだろう。

そんなバリーさんは、自分がウェイターとして働いていた時に週に 3~4 日、決まってディナー・タイムの開店直後の夕方に店に来てくれていた常連さん。恐縮ながら "My Japanese Son" と呼んでもらっていたほど親しくさせてもらっていて、自分もいつも "Barry-san!" と呼んでいた。

特に思い出すのは冬の夕方。肌を突き刺すような冬のマンハッタンの寒さに身を屈めながら、4 つ折にした新聞を小脇に挟んで厚手のコートに真っ赤なマフラーといういでたちでゆっくりと歩いて来るバリーさんの姿。ミュージカルの劇場が並ぶ通りに面する窓越しから自分の姿を見つけるとニコッと微笑みながら軽く手を上げ、決まって窓側の 2 人用のテーブルにポツンとひとり静かに腰を掛るバリーさん。暖かい緑茶を飲みながら、大好きなお寿司、ほうれん草のおひたし、（特別に）豆腐とワカメが多めに入った味噌汁等を食しては、いつも人懐っこく満足そうな笑顔で帰っていった。

時々バリーさんが訪れると、バリーさんの名盤を録音したカセット・テープを BGM 代わりに店で流し、バリーさんが「自分のアルバムだ！」と驚くことがあったが、それが自分の仕業だとわかるとニヤッと微笑んでくれた。また店での付き合い以外にも、バリーさんがタイムズ・スクエア近郊で主宰するジャズ教室に遊びに行ったり、ライヴにも足を運んだが、ジャズ・音楽を通しての関係というよりは、ウェイターとお客さんとしての関係の方が濃かったかもしれない。自分にとっては偉大なジャズマンという以上に特別な人だった。

現在、82 最歳。バリーさんの笑顔、素晴らしいピアノが懐かしい限りだが。どうか末永く、いつまでもお元気に。